

形容詞の意味特徴と日本語教材レベルの対応関係の 分析

劉, 婧怡
九州大学大学院地球社会統合科学府

<https://doi.org/10.15017/4752551>

出版情報：地球社会統合科学. 28 (2), pp.24-36, 2022-01-31. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：(c) 2022 LIU JINGYI



形容詞の意味特徴と日本語教材レベルの対応関係の分析¹

An analysis of the correspondence between semantic features of adjectives and the level of Japanese textbooks

リュウ セイイ
劉 婧怡

要旨

The purpose of this paper is to examine the characteristics of adjectives at each level based on the corpus, which covers Japanese reading textbooks published after 2010 and to clarify the usages at each level for dimensional adjectives. In order to illuminate the semantic features of adjectives, the high frequency words of each level were classified based on the “*Bunrui goihyo* (Classified Vocabulary Table)” (National Institute for Japanese Language and Linguistics, 2004). The results of correspondence analysis showed that adjectives expressing “Relation – Quantity” (e.g. *takai* [high]) and “Relation – Aspect” (e.g. *warui* [bad]) were used more frequently across all levels. It was revealed that the level of abstraction of adjectives differed at each level. Next, dimensional adjectives with a wide range of meanings and usages (*takai* [high] / *hikui* [low], *nagai* [long] / *mijikai* [short], *okii* [big] / *chiisai* [small], *hiro* [wide] / *semai* [narrow]) were selected to analyze their semantic features and usages at different levels. The results showed that the cases of semantic expansion (eg. a long life) increased with the difficulty of the texts, and that the number of predicative uses, in which the adjective is used as a predicate to indicate recognition or evaluation (eg. “The barriers to gender role awareness seem to be high.”) increased.

キーワード：次元形容詞, 日本語読解教材, 分類語彙表, 対応分析, 意味特徴

1. はじめに

形容詞は、言葉の色付け、話し手の思想や感情を伝達する要素として果たす役割が大きい。日本語教育現場で初級段階に導入される品詞項目であり、非常に重要な項目だと言える。しかし、形容詞そのものの分類や用法に着目する研究は数多くあるが(西尾1972, 樋口1996など)、日本語教育現場で形容詞の取り扱いに関する研究は限られている。また、形容詞は早い段階に導入されるものの、習得が容易であるものとは言えない。日本語教育用の語彙リストの調査結果(スルダノヴィッチ・イレナ他 2013)により、形容詞は総語数の約2%程度であることが示されているが、意味や機能は多岐にわたる。例えば、「高い」は空間概念を表すほか、香りの「範囲」の拡張性など6つの意味も持つ。また、形容詞は名詞を修飾する品詞であるが、「? 高い背」「? 長い気」など、名詞との組み合わせによっては不自然な場合もある。これは、学習者にとって理解が難しい部分であると考えられる。本研究は形容詞の学習面で日本語学習者を支援するために、言語教材における形容詞の使用実態を明らかにする。

本研究は、自作した『レベル別日本語読解教材コーパス』に基づき、教材の各レベル(初中級, 中級, 中上級, 上級)における形容詞の特徴を考察し、さらに出現頻度の高い次元形容詞を対象にレベル別の意味特徴と用法の傾向を解明することを目的とする。具体的には、まず、各レベルの高頻度語を『分類語彙表増補改訂版DB』(国立国語研究所2004)に基づいて分類する。また、多変量解析の手法である対応分析を用い、レベル別の形容詞の特徴を明らかにする。さらに、意味や用法が多岐にわたる次元形容詞(高い/長い/大きい/広い)とそれぞれの対義語を含むものを取り上げ、レベルごとの意味特徴と用法の傾向を分析する。

以降、2節で形容詞と次元形容詞の先行研究を概観し、3節でデータと手法を提示する。4節で結果と考察を示し、5節で全体のまとめと今後の課題を提示する。

2. 先行研究

2-1 形容詞に関する先行研究

日本語の形容詞について、言語学の視点から一連の研究が行われてきた。その分類に関して、西尾(1972)は形容詞を客観的な性質の有無により、「属性形容詞」と「感情形容詞」に区別する。荒(1989)、樋口(1996)は、形容詞を時間的限定性の有無によって「状態形容詞」と「質形容詞」²と定義する。その一方、形容詞の分類を文レベルで考察する必要性を指摘した八亀(2003)は、形容詞の分類を時間的限定性の問題と「認識レベル・評価レベル」の二重構造の側面から考慮する方向を提案している。

また、日本語の形容詞は、(1)名詞を修飾限定する<限定用法>(例:高い山)、(2)ガ格を補完する二重主語文やニ格をとる形容詞文の中で述語とする<叙述用法>(例:人生が長い。)、(3)動詞述語を修飾限定する<修飾用法>(例:就職率は高く伸びている。)、(4)語尾を変形し、名詞として使われる<名詞化用法>(例:山の高さ)、という4つの機能が認められる。機能による形容詞の本質を巡り、異なる見解がある。(2)の述語になる<叙述用法>は、文の骨組みを構成する成分であり、それを形容詞の本質だとみる立場(八亀2008など)が見られる一方、(1)の「名詞を修飾限定する機能」は形容詞を他の品詞から区別する特徴であり、この特徴を形容詞の最も重要な性質であると認めようとする立場もある(鈴木1972,仁田1998など)。本稿では、日本語読解教材の形容詞用例において、用例を取り出し考察した結果、名詞を修飾する限定用法が形容詞を他の品詞と区別し、数量的にも圧倒的であると読み取れるため、鈴木(1972)や仁田(1998)の観点を支持する(4-2-2節)。この他には、形容詞研究を認知意味論研究の一環として、形容詞の非典型用法である共感覚用法や意味拡張の研究も近年多く挙げられる(雨宮2008,西内2017など)。

その一方、形容詞は動詞や名詞より直接に意味表出と関わらないものであるため、これまでの研究は言語学の側面に主眼がおかれ、言語教育の視点における形容詞の調査は限られている。森田(1980:111)は早稲田大学語学教育研究所編『外国学生用日本語教科書・初級』(昭和42年初版)を例とし、学習語総数2,105語のうち形容詞は80語で、『例解国語辞典』に形容詞が537語であったことを考えると、約15%近くの形容詞を初級段階の6ヶ月間で学習してしまうことが明らかになった。よって、「形容詞は初級段階で与えておかなければならないという語群である」と指摘されている。本稿では、形容詞の学習面で日本語学習者を支援するために、言語教材における形容詞の使用実態を明らかにする。

2-2 次元形容詞に関する先行研究

「次元」について、『国語辞典』(第十一版)は「【数】幾何学的図形・物体・空間の広がりを示す概念。線は一次元、平面は二次元、立体は三次元。」と定義している。現代日本語における、空間的な特性を表す中心義を有する形容詞は「次元形容詞」と命名される(cf.国広1970)。次元形容詞の先行研究は形容詞のものと同じ傾向が示され、言語教育・教材の観点からの調査はほとんど行われてこなかったが、大量の用例に基づき、意味の記述及び認知言語学の分野で意味拡張の仕組みに関する研究が多く挙げられる。

西尾(1972)では、大量の文学作品、科学説明文・論説文、雑誌の用例を収集し、次元形容詞は「空間の中に位置して、そのある部分を占めている。その占めている量の大小に関係する」(西尾1972:69)を表す形容詞と定義し、基本的な9対の次元形容詞「ながい—みじかい」「とおい—ちかい」「たかい—ひくい」「ふかい—あさい」「あつい—うすい」「ふとい—ほそい」「あらい—こまかい」「おおきい—ちいさい」「ひろい—せまい」を取り上げている。また、それぞれを何次元の量を表すかによって、一次元を表すもの(例:「長い/短い」「高い/低い」と多次元を表すもの(例:「大きい/小さい」「広い/狭い」)を分けており、<性質/位置>、<基準面に対する向き>、<はかり方>及び<人の位置との関係>の面から意味記述を行った。

小出(2000)では、次元形容詞の概念を明確にしており、それを「『大きい』『長い』など、空間内に存在する対象の何らかの次元について、『大きいすいか』『長い道』などと、その空間量を表すものである」と定義する。また、次元形容詞の用法を空間的な量を表す「空間的用法」と抽象的な対象について用いられる「非空間的用法」(例:「大きい成果」「長い議論」)の2つに分類し、「空間的用法」を次元形容詞の基本的な用法として位置付けた。本研究は、小出(2000)で明確にされた次元形容詞の「空間的用法」と「非空間的用法」は、教材コーパスにおいてどのように使用されているかを検討していく。なお、小出(2000)では研究対象とされていない、対となる次元形容詞(例:「高い/低い」「長い/短い」)も取り上げ、考察する。

一方、西内(2017)は、次元形容詞の基本的な意味のみではなく、文法構造における多義の表出とのつながりに着目し、

次元性表出の標識を被修飾名詞の場所的素性と関わっている可能性を検討した。具体的には、いずれの次元形容詞にも、被修飾名詞に場所化成分³が一定数使われていることから、名詞の場所的特性が<次元性>の喚起に関わっている一方、被修飾名詞が場所性を帯びない場合、<次元性>を表出するには、ガ格を補完する二重主語文や二格をとる形容詞文の構造をとることを述べている。

本研究は、以上の先行研究の見解に基づき、日本語読解教材コーパスにおける次元形容詞の意味特徴および機能上の特徴を明確にする。

3. データと手法

3-1 『レベル別日本語読解教材コーパス』

本研究では、『レベル別日本語読解教材コーパス』を用い、その中の形容詞を対象に、各レベルの特徴を分析する。このコーパスは、2010年以降出版された日本語読解教材、初中級8冊、中級5冊、中上級5冊、上級3冊の合計21冊を収集し、合計496の文章、389,847語のデータが格納されている電子データである(表1)。レベル分けの基準は原則的に教科書自体の分け方に従うものである。

表 1 『レベル別日本語読解教材コーパス』の基本情報

	初中級	中級	中上級	上級	合計
冊数	8	5	5	3	21
文章数	167	54	215	60	496
延語数	94,707	110,414	130,011	54,715	389,847
異なり語数	5,228	5,095	9,508	6,232	26,063

3-2 『分類語彙表増補改訂版DB』(国立国語研究所2004)

『分類語彙表』は、現代日本語の意味研究、特に語彙研究によく用いられているシソーラスである。増補改訂版(2004)は初版(1964)の趣旨に沿い、収録語数を増やすだけでなく、分類項目の枠組みをより体系的に整理している。分類方法は、最初に4類を分けており、名詞の仲間を「1.体の類」、動詞の仲間を「2.用の類」、形容詞の仲間を「3.相の類」、その他の仲間を「4.その他の類」としている。さらに、1.抽象的關係、2.人間活動の主体、3.人間活動-精神及び行為、4.生産物及び用具、5.自然物及び自然現象、の5つの部門に分けており、増補改訂版での意味分類方式は、番号を用いてそれぞれの分類項目の体系的な位置づけを示したところに特徴がある(国立国語研究所2004)。分類番号は、図1のような5桁の数字として表記され、「類」「部門」「中項目」「分類項目」という4階層の構造を示す。

形容詞は、原則的に「3.相の類」に所属するが、ここで注意すべきことは、「3.相の類」の中には、形容詞のみだけでなく、形容動詞⁴や連体詞(例:大きな/小さな)なども含まれるということである。本研究では、「形容詞」の概念を広義の意味で取り扱い、狭義の「形容詞」と「形容動詞」、あるいはそれと相当する「イ形容詞」と「ナ形容詞」⁵の両方ともが含まれる。形容詞における「3.相の類」は、さらに「3.1抽象的關係」「3.3精神及び行為」「3.5自然現象」の3つの部門に分けられる。また、初版に比べ増補改訂版は、「中項目」が見出し語として明記されており、表2のような一覧にすることができる。



図 1 分類番号の構造

表 2 形容詞における分類一覧

3. 相の類		
3.1 抽象的關係	3.3 精神及び行為	3.5 自然現象
3.10 真偽	3.30 心	3.50 自然
3.11 類	3.31 言語	3.51 物質
3.12 存在		3.52 天地
3.13 様相	3.33 生活	3.53 生物
3.14 力	3.34 行為	
3.15 作用	3.35 交わり	
3.16 時間	3.36 待遇	3.56 身体
3.17 空間	3.37 経済	3.57 生命
3.18 形		
3.19 量		

3-3 対応分析の概要

対応分析 (correspondence analysis) は、フランスのベンゼクリによって1960年代に提唱され、1970年代から普及し始めたカテゴリカルデータの解析方法で、コレスポンデンス分析とも呼ばれる (cf. 柳井1994)。基本的な考え方は、2つの項目間のクロス集計表において、行の項目と列の項目の相関が最大になるように、行と列の双方を並び替えることである。対応分析では、行の得点と列の得点を同じ画面に配置した散布図がよく用いられ (4-1-3 節)、X軸 (第一成分) とY軸 (第二成分) の寄与率の和を累積寄与率といい、70~80%に達すると説明力があると認められる。通例、XとY軸それぞれの絶対値の小さい項目は偏りが小さいと言え、絶対値の大きい項目は原点から離れ、偏りが大きいと解釈できる。また、互いに関連の強い項目同士は、原点からみて同一方向に布置される性質が認められる。

4. 結果・考察

4-1 日本語読解教材におけるレベル別の使用傾向

4-1-1 レベル別形容詞使用の全体像

表3は、『日本語読解教材コーパス』におけるレベル別の形容詞の使用実態である。

表 3 『日本語読解教材コーパス』における形容詞の使用実態

	語数	形容詞延語数	形容詞使用頻度	形容詞異なり語数	異なり語/延語数
初中級	94,707	2649	2.8%	295	11.1%
中級	110,414	2712	2.5%	261	9.6%
中上級	130,011	3534	2.7%	580	16.4%
上級	54,715	1345	2.5%	370	27.5%
合計/平均	389,847	10240	2.6%	794	7.8%

日本語読解教材において、形容詞の使用頻度は約2.6%であることが読み取れ、これはスルダノヴィッチ・イレーナ他 (2013) の指摘を数量的に支持するものだと言える。また、形容詞の異なり語数と述べ語数の比率からわかるのは、上級は全レベル平均 (7.8%) を上回る数値 (27.5%) が得られたことである。すなわち、言語学習の初期段階に、数多くの形容詞が導入されるが、形容詞の種類は限られているということである。その一方、教材レベルが上昇につれて、異

なり語数の割合も高くなり、語彙の使用範囲も広がることになった。なお、中上級から複合形容詞（例：気持ち良い/生臭い）や漢字を語幹とするナ形容詞（例：必要/健康）などが見られたので、これらは異なり語数の比率が高いことの要因であると考えられる。

その一方、中級レベルにおいて、異なり語数の割合は初級よりマイナス1.5%になっている。この理由としては、教材自体に差異があることのほか、中級から形容詞の多義性を導入の焦点が当てられることが考えられる。以下では、形容詞「明るい」を例として、初中級と中級読解教材の共起語の比較によって、中級から形容詞の種類より、意味の派生やコロケーションの多様性に導入の焦点が当てられることを説明する。

表4は、「明るい」の意味及び初中級・中級における共起語を示したものである。語義は『大辞林』第二版（1995）を参照したものであり、便宜的に（1）の「光が十分にある」という意味をプロトタイプの意味であるとする。すると、（2）～（6）はいずれもレトリックに基づき意味派生されたものだと考えられる。

表4 「明るい」の意味およびレベル別の共起語

初中級	「明るい」の意味	中級
雲・空・部屋	(1)光が十分にある、またそのように感じられる状態である。	家の周り・空・通り・部屋・星・庭・光
—	(2)色が澄んでいる。黒や灰色などがまじらず鮮やかである。彩度が高い	—
人・話	(3)人の性格や表情・また雰囲気などが、かたわらにいる人を楽しく、朗らかな感じを与える。	声・気持ち・女の子・顔・歌・人
—	(4)物事の行われ方に、不正や後ろ暗いところがない。	言う
—	(5)未来のことに対して、希望を持つことができる状態である。	未来
—	(6)その物事についてよく知っている。精通している。くわしい。	—

表4からわかるのは、初中級において共起語の種類が、中級より限られていることである。初中級は、「明るい」と共起する語は「雲・空・部屋」及び「人・話」しかない一方、中級では、「家の周り・空・通り」など7語、「声・気持ち」など6語、「言う」「未来」の合計15語と共起することが明らかになった。一方、中級では、初中級で出現してない(4)「物事の行われ方に、不正や後ろ暗いところがない」、(5)「未来のことに対して、希望を持つことができる状態である」の意味を表す用例も見出される。このように、意味の派生用法や共起語の多様性に関わらず、いずれも初中級との相違が見られ、これは中級レベルの特徴ではないかと考えられる。

4-1-2 各レベル高頻度形容詞の意味特徴

続いて、高頻度形容詞の意味特徴の考察である。具体的には、まず、『分類語彙表増補改訂版DB』（国立国語研究所2004）において、形容詞が所属している「3.相の類」の下位分類の「部門」、「部門」⁶—「中項目」⁷に基づき、エクセルのVLOOKUP関数で読解教材中の形容詞を意味分類した。その上で、エクセルのピボットテーブルで集計表を作成した。なお、複数の意味を持つ語に対して、国語辞典で記載される第一義を語の中心的意味⁸と見なすこととした。

検索対象としたのは各レベルの上位10語と全体の上位80語である。各レベルにおいて、使用頻度が上位10語の形容詞の意味特徴を明確し、さらに上位80語で対応分析を行い、レベルと形容詞の意味特徴の関係を可視化する。上位80語は、異なり語数794語の上位10%をカバーするものを抽出したものである。

表5-8は、上位10語の意味特徴を示したものである。

表 5 初中級の上位10語

順位	見出し語	意味分類	使用頻度	%
1	良い	関係-様相	156	7.83%
2	ない	関係-存在	135	6.78%
3	多い	関係-量	100	5.02%
4	大きい	関係-量	87	4.37%
5	いろいろ	関係-様相	65	3.26%
6	新しい	関係-時間	57	2.86%
7	好き	活動-心	53	2.66%
8	大切	活動-心	52	2.61%
9	高い	関係-量	47	2.36%
10	強い	関係-力	46	2.31%
10	きれい	関係-様相	46	2.31%

表 6 中級の上位10語

順位	見出し語	意味分類	使用頻度	%
1	ない	関係-存在	189	9.03%
2	良い	関係-様相	168	8.03%
3	早い	関係-時間	70	3.35%
4	悪い	関係-様相	64	3.06%
5	多い	関係-量	55	2.63%
6	強い	関係-力	54	2.58%
7	大変	関係-事柄	48	2.29%
8	高い	関係-量	47	2.25%
9	うれしい	活動-心	46	2.20%
10	長い	関係-量	45	2.15%

表 7 中上級の上位10語

順位	見出し語	意味分類	使用頻度	%
1	ない	関係-存在	386	17.19%
2	良い	関係-様相	137	6.10%
3	多い	関係-量	124	5.52%
4	必要	活動-経済	114	5.08%
5	自然	自然-自然	109	4.86%
6	大切	活動-心	62	2.76%
7	自由	関係-作用	53	2.36%
8	さまざま	関係-様相	52	2.32%
9	大きい	関係-量	50	2.23%
10	高い	関係-量	49	2.18%

表 8 上級の上位10語

順位	見出し語	意味分類	使用頻度	%
1	ない	関係-存在	113	14.16%
2	多い	関係-量	55	6.89%
2	必要	活動-経済	55	6.89%
4	良い	関係-様相	41	5.14%
4	高い	関係-量	41	5.14%
6	可能	関係-様相	34	4.26%
7	健康	自然-生命	33	4.14%
8	自然	自然-自然	23	2.88%
9	少ない	関係-量	21	2.63%
10	大きい	関係-量	20	2.51%
10	長い	関係-量	20	2.51%

レベル間の共通点を見ると、レベルを問わず「関係⁹」を表す形容詞はもっとも頻度が高いとわかった。初中級において、第7位の「好き」と第8位の「大切」を除き、すべての形容詞は「関係」を表すものである。他のレベルも同様、中級は第9位、中上級は第4～6位、上級は第2、7、8位を除き、すべての形容詞は「関係」に属する。その一方、「関係」を表す形容詞の中で、特に「関係-量」(例:大きい/高い)と「関係-様相」(例:良い/きれい)を表す形容詞の使用が確認された。

また、レベルの両極である初中級と上級の意味特徴の差について、初級では「良い」「新しい」「高い」「強い」など、プラスの意味及び評価を伴う形容詞が特徴的である。また、物事の基本属性を表す「関係-時間」「関係-量」の形容詞、及び人間の感情を表す「活動¹⁰-心」の形容詞も挙げられる。すなわち、初中級の読解教材では、物事の属性及びそれがもたらす人間のプラスの評価または積極的な感情の表出に関する形容詞が一般的である。以下、具体例に基づき検討する。

- (1) 日本で青森県にリンゴの木がいちばん多いです。青森のリンゴは甘いです。そして、とてもおいしいです。
(初中級_「日本の名物」)
- (2) 野球大好きです。
(初中級_「野球を見にいきましょう」)

(1)は日本の名物について、青森県を取り上げ、その名物であるリンゴの特徴を述べている。リンゴの属性である「数量」「味」を「多い」「甘い」で、人間の「評価」を「おいしい」でそれぞれ表している。(2)は、日本の伝統的なスポーツである野球について、話者は「好き」で積極的に評価する。

その一方、上級は「多い」に対し、その対義語「少ない」も見られ、「良い」に対し、「ない」も1位に挙げられる。また、「自然-生命」(例:健康)「自然-自然」(例:自然)など自然科学に関する、抽象度が高い形容詞も確認された。このように、上級の読解教材は、人間の感情・感覚など主観的な表現より、物事を多角度から批判的に取り扱い、一定の抽象性を有するものが多いと言える。例えば、次の例が観察された。

(3) 産出量が少ないので、何とかして他の金属を金に変えることはできないかと多くの人々が努力を重ねてきた。

(上級_「物質の正体」)

(4) 高齢社会の課題は3つ。①健康で自立して生きられる期間の延長②心身が弱っても住み慣れたところで暮らせる環境整備③人と人とのつながりづくりーだ。

(上級_「高齢社会は怖くない」)

例(3)は地球や宇宙の構成である金元素に関して、その産出量が少ないことに対する人々の試みを述べている。そもそも理想的とは言えない「金元素の産出量は少ない」の事態を改善するため、人々は何らかの積極的な行動を起こすという意味である。つまり、焦点は物事の属性(「少ない」)ではなく、それにもたらす人間の行動や対応策である。(4)は高齢社会の課題について、3つ挙げている。まず、「健康な状態」で自立して生きられる期間の延長は高齢社会の1つ目の課題と認められる。「健康な状態」は一定的な医学データに基づき判断できるものだが、誰でも明確に定義できるわけではなく、抽象的な概念と考えられる。

以上の分析から、上級の読解教材は、人間の感情・感覚など主観的な表現より、一定の抽象性を持つことが特徴であると考えられる。それに対して、物事の属性及びそれにもたらす人間の評価、特にプラスの評価を表す形容詞が初中級教材に、特徴的であると言える。

4-1-3 対応分析による各レベルの形容詞の意味特徴

形容詞の意味特徴とレベルの関係を見やすくするため、集計表に対し多変量解析手法の1つである対応分析を行った。対応分析の実施には、統計ソフトR(Ver.4.0.3)を使用し、caパッケージのca関数によって計算した結果を図2で示す。なお、第一次元(X軸)の寄与率は76.4%、第二次元(Y軸)の寄与率は18.1%で、2次元における累積寄与率は約94.5%、つまりデータの9割以上を説明することができる。また、結果の解釈を補助するために領域を示す円を手動で付け加えた。

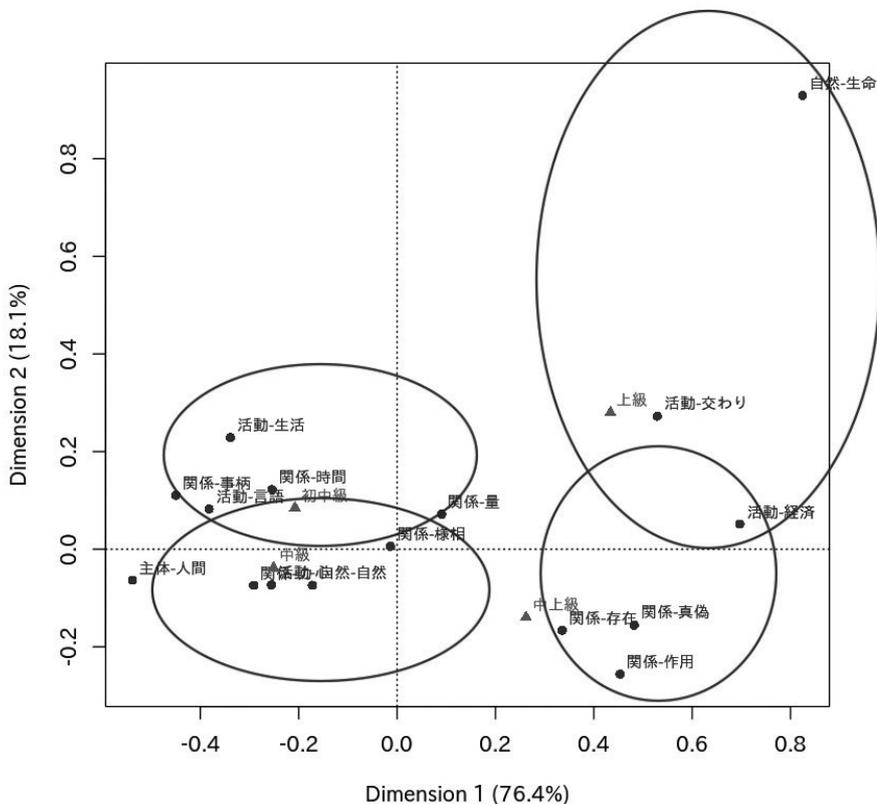


図2 対応分析の結果

それぞれのレベルの付近にプロットされた形容詞の分類を観察すると、初中級と中級では「活動-生活」(例:幸せ)、「関係-時間」(例:新しい)、「関係-量」(例:高い)、「関係-様相」(例:良い)、「関係-力」(例:強い)などが見られ、初中級段階では、自分の感覚や感受を表す具象的な形容詞は特徴的なものである。また、中上級は、「関係-作用」(例:自由)、「関係-真偽」(例:重要)、上級は「自然-生命」(例:健康)、「活動-経済」(例:必要)、「活動-交わり」(例:平和)が密接に関連していることがわかった。これらは、初中級レベルより抽象的な概念を表す形容詞であると考えられる。

4-2 日本語読解教材における次元形容詞の使用特徴

本研究は、使用頻度が高い「関係-量」を表す形容詞を中心に、その中でも特徴的である「空間の量」を表す次元形容詞を対象として、意味面と機能面から日本語読解教材の取り扱い方を検討していく。次元形容詞は「空間の量」という典型的な意味のほか、意味の転用及び拡張する用法(例:評価が高い)も見られ、それらは母語話者の認知機構を反映するので、異なる背景を持つ学習者にとって理解しにくい点が認識された。そのため、本節は意味や用法が多岐にわたる次元形容詞「高い/長い/大きい/広い」とそれぞれの対義語を対象として、レベル別の意味特徴を考察する。

レベル別の次元形容詞の意味特徴を考察するため、まず意味や用法などに詳細な説明がある『大辞林』第三版(2006)と『明鏡国語辞典』第2版(2010)を参照し、小出(2001)が指摘した「空間的意味」と「非空間的意味」の概念を用いることで、対象となる4対の次元形容詞(高い/低い,長い/短い,大きい/小さい,広い/狭い)の意味分類表を作成する(例:表9)。さらに、対応分析を行い、レベル別の次元形容詞の意味特徴を可視化する。

表9 本研究における「高い/低い」の意味分類

	空間的な意味	非空間的な意味
高い	<次元> 上方への距離が大きい (小さい)。	<数・量>の拡張性:値段・コストなど <程度>純度・血圧・音など <価値>の上昇性:能力・身分・理想・地位など <範囲>の拡張性:香り・悪評など <慣用句>的意味:「鼻が高い」など
低い		<数・量>料金・コストなど <程度>の限定性:血圧・精度など <価値>の限定性:品格・志向・地位・能力など

4-2-1 レベル別の次元形容詞の意味特徴

本節では、次元形容詞の意味特徴と教材レベルの関係を検討する。具体的には、Python 3の環境にMeCabを実行できるライブラリであるmecab python3 (Ver.0.996.5)をインストールした上で、ChaSenという形態素解析器と互換の出力をする設定にし、各レベルの読解文に形態素解析を行う。また、4対の次元形容詞を対象としてコロケーションのKWIC検索を行い、対象語である次元形容詞を含む前後10語を取り出し、エクセルで集計した。その結果、「高い/低い」合計216例、「長い/短い」189例、「大きい/小さい」274例、「広い/狭い」61例が得られた。さらに、文脈及び形容詞の共起語を踏まえ、それぞれに意味タグを付けた。意味タグは、おおよそ国語辞典の用例を参照したものであるが、国語辞典の分類に従わないと考えられる文については母語話者3名と相談し、多数の意見に従った。最後に、次元形容詞の「空間的意味」と「非空間的意味」の関係性を可視化するために対応分析を行い、日本語読解教材において次元形容詞の意味特徴を検討していく。

用例数が最も多い次元形容詞「高い/低い」において対応分析を行った結果を図3で示す。この結果は累積寄与率が90%に近く、説明力が高いと言える。全体から読み取れることについて、まず、座標の1-4象限は、おおよそ4つのレベルに分けることができる。そのうち、原点を中心に、初中級と中級、中上級と上級がそれぞれX軸の両側に分布していることが読み取れる。また、X軸の寄与率はおおよそ70%以上になるので、初中級と中級及び中上級と上級の間の使用実態の類似性を説明できる。

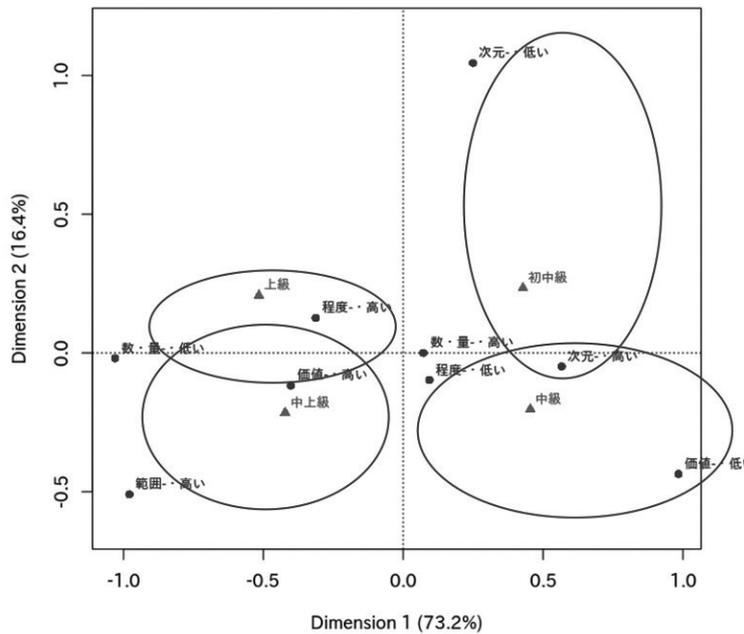


図3 「高い/低い」対応分析の結果

また、それぞれのレベルの付近にプロットされた意味タグを観察すると、「空間的な量」を表す「次元-(形容詞)」はすべて初中級、中級の枠に配置され、次元形容詞の中心義である空間的用法は中級以下の段階で出現することがわかった。その一方で、「非空間的意味」は、中上級、上級レベルの付近に分布していることを読み取れ、ほかの3対の次元形容詞(長い/短い,大きい/小さい,広い/狭い)の分析でも「高い/低い」と同様の傾向が示された。また、「慣用句的意味」は、中心からもっとも離れた位置にあることが明らかになった。さらに、慣用表現の使用頻度も非常に少なく、「高い/低い」の216例の中から、「慣用句的意味」は1例も見当たらない。他の「長い/短い」「大きい/小さい」「広い/狭い」にも1例しかない。重松(1993:268-279)は、慣用表現は国の文化を背負った表現であるため、教育にあたっては必要に応じて頻度が高いものであると主張した。例えば、「小さい」と「秋」のは、一見すれば連想力の強い組み合わせではないものの、日本童謡の文句であり、童謡の社会性ということから社会的ステレオタイプの例として取りあげられ、「慣用表現」という枠内で捉えることができる(cf.川出1993)。言語学習において、このような慣用表現は個人の経験や目標言語の社会の理解に関わるので、自然習得もしくは自然に運用できるようになるのは困難だと想定される。今後の読解教材作成において、慣用表現や日本社会に関わる言語表現の紹介を「テキスト」や「コラム」の形で、意識的に学習者に提示することが有効であると考えられる。その際、「高い/低い」などの形容詞の用法の非対称性¹¹についても付記することも形容詞の用法に注意を向ける効果があるだろう。

4-2-2 レベル別次元形容詞の機能

2-1節で述べた通り、日本語の形容詞は、(1)名詞を修飾限定する<限定用法>、(2)ガ格を補完する二重主語文やニ格をとる形容詞文の中で述語とする<叙述用法>、(3)動詞述語を修飾限定する<修飾用法>、(4)語尾を変形し、名詞として使われる<名詞化用法>という4つの機能が認められる。本研究では、それぞれの機能を「限定」「叙述」「修飾」「名詞」で表記し、レベル別の使用特徴を考察する(表10)。

表10 レベル別の次元形容詞の機能

	初中級		中級		中上級		上級		合計
限定	132	56.7%	105	48.2%	62	33.2%	22	21.6%	321
叙述	44	18.9%	47	21.6%	57	30.5%	52	51.0%	200
修飾	51	21.9%	60	27.5%	45	24.1%	23	22.5%	179
名詞	6	2.6%	6	2.8%	23	12.3%	5	4.9%	40
合計	233	100.0%	218	100.0%	187	100.0%	102	100.0%	740

日本語読解教材では、名詞を修飾する<限定用法> (例:大きい水槽) がもっとも多く使われ、その次に<叙述用法> (例:水槽が大きい) <修飾用法> (例:高く伸びる) で、最後は名詞化用法 (例:山の高さ) であるとわかった。その一方、<限定用法>は、全体的にもっとも使われるだけではなく、初級段階である学習者にとって最も多く導入される用法であると明らかになった。そのため、形容詞の<限定用法>の重要性が数値から証明でき、仁田(1998)の「形容詞の本領は、やはり名詞を修飾限定する装定用法に在る」という主張を補強できる。

また、レベル間の関係から確認されたのは、初中級と中級において数値的には大きな差が見当たらず、どちらも「限定」「修飾」「叙述」「名詞」の順に使用され、同じ傾向を示すと言える。上級では、<叙述用法>は圧倒的に多く使われ、全体の5割以上を占め、初中級と中級とは明確な差が見られる。その一方、中上級では、「限定」「叙述」「修飾」の用法は約3割を占めており、4つのレベルの中で最も均等に分布していると見えるレベルである。この分析により、中上級は初級段階と上級段階の架け橋として機能していることが読み取れる。

さらに、各機能における使用頻度は、レベルが上昇するにつれて、限定用法の使用頻度は少なくなる傾向が見られる一方、叙述用法の使用頻度が増加していることがわかった。叙述用法では、初中級は使用頻度が低い(18.9%)のに対し、上級はもっとも高い(51.0%)ことが明らかになった。この理由は、形容詞述語文が備える評価的な意味を用いて説明することができる。形容詞の評価的な意味について、樋口(2001:43)は、「評価」を「物の意義を明らかにする、人間の意識的な活動のことを《評価》とよぶことにする」と指摘し、形容詞述語文は「物事の属性」と、人間の意識的な活動である「評価」を表すという2つの構造を明確にした。例えば、読解教材の発話例で検討しよう。

(5) ここの水槽はととても大きいです。

(初中級_「沖縄へ行きたい」)

(5) と言うとき、「大きい」という特性は、「この水槽」に客観的に備わっている特徴として挙げられる一方で、話し手の中のなんらかの基準との比較のなかでもとらえている。この場合、おそらく話し手が、「今までの自分の経験」「この水槽をどこで何のために使うか」という目的意識などを考慮し、「大きい」という《評価》を下している。その一方、水槽を見て自分の経験などにより「この水槽は(前見たものより)小さいです。」と評価する可能性もあるので、「水槽」の大きさの評価は話し手次第であると言える。無論、「大きさ」は実際に測量できるものだが、言語生活の中で「大きい」「小さい」という評価を下すとき、話し手によるものが大きく、人それぞれだと考えられる。これは、形容詞文の評価性と定義され(樋口2001, 八亀2003)、また、八亀(2003)によって、すべての形容詞(述語文)に評価性が認められる。

その一方、形容詞は名詞の修飾語とされるとき、評価的な意味のかわりに、物事の属性を表す用例が顕著に見られる。

(6) 大きい声を出さないで。

(中級_「最後の一句」)

(7) そして、あなたは他の若い力士と一緒にご飯を食べて、大きい部屋で一緒に寝ます。

(中級_「相撲」)

(6)は、動詞述語文である。そのうち、形容詞「大きい」は、「声」の修飾用語として使用され、削除されても文が成立する。そもそも、「大きい」は文の意味を決定する部分ではなく、評価を下すことより、「声」の1つの属性であると理解すればよい。(7)は、主人公の一日の生活に関する記述文である。文の主旨は「部屋」の大きさを評価するのではなく、事態を表すのみである。そのため、「大きい」は「部屋」の特徴や属性であると理解することが妥当だと考えられる。

このように、形容詞は述語として使われる際に、評価的な意味を著しく表すのに対し、限定用法において、評価的な意味が弱くなり、属性と理解すれば十分であると明確になった。この点についても、レベル間の差異を説明できる。つまり、初中級は、形容詞で物事の属性や特徴を表すことが特徴的である一方、レベルの上昇につれて、物事の属性の他、話し手の認識など評価的な意味も強調されることが明らかとなった。また、上級でよく出現する形容詞述語文の多くは「かもしれない」「ようだ」のような判断のモダリティと共起する。それは話し手の意識と関連づけ、評価的な意味を表すものであると考えられ、他のレベルと区別することができる(例8、9)。

(8) 速度によって失われるものは、ほくらが考えている以上に大きいかもしれない。

(中上級_「速度によって失われるもの」)

(9) それでも、性別役割意識の壁は高いようだ。

(上級_「輝く女性」とは何なのか-「女性活躍の現場」)

最後に、動詞述語を修飾限定する<修飾用法>は、数値的にはレベル別に明確な差が見られないものの、共起動詞をまとめてみると差異が見られる(表11)。

表 11 日本語読解教材における次元形容詞の共起動詞

	初中級	中級	中上級	上級
高い 低い	なる・売れる・評価する・上がる・見せる	なる・上る・上げる・昇る	なる・評価する	する・評価する・なる・働く・設置する
長い 短い	続く・続ける	なる・生きる・いる・住む	なる・待つ・続く	続ける・運転できる・暮らす・続く
大きい 小さい	する・動かす・回る・なる・ある・違う・変化する・負ける・伸びる・動く・出る・節約する・変える・揺れる・	なる・光る・開ける・変わる・報道する・違う	変わる・左右する・異なる・取り上げる・報じる・する・違う・図る・なる・揺れる・開ける	する・上回る・減少する・下降する・分ける・落ち込む・異なる・なる・報道する
広い 狭い	使う・ある	知る	用いる・見る・普及する・関心する・集める・歓迎する・信じる・持つ・なる	共有する

表11は、次元形容詞の<修飾用法>において、各レベルの共起動詞を示している。全体から見ると、レベルを問わず、次元形容詞は常に「変化」を表す動詞と共起することがわかった。「高い/低い」は「上がる」「なる」など、「長い/短い」は「なる」「続く」「続ける」、「大きい/小さい」は「伸びる」「変える」、「広い/狭い」は「なる」などの例が挙げられる。また、レベル別の相違点から見ると、初中級と中級において、次元形容詞は常に「大きく動かす」「高く上がる」の形で、具体的な、イメージしやすい和語動詞と共起する一方、中上級や上級になると、「大きく報道する」「広く共有する」「広く歓迎される」のような抽象的な、イメージしにくい漢語動詞と共起する例が多いと分かった。また、上級段階の教材には、「大きく落ち込む」「大きく上回る」などの複合動詞と共起する例も多くみられる。

5. まとめと今後の課題

本研究では、自作した『レベル別の日本語読解教材コーパス』における、各レベルの形容詞の使用特徴を考察し、「関係-量」(高い)「関係-様相」(悪い)を表す形容詞の使用はどのレベルでも共通点があること、各レベルにおいて形容詞の抽象度が異なることが観察された。また、出現頻度の高い次元形容詞「高い/長い/大きい/広い」とそれぞれの対義語の意味表出と機能に着目し、レベルの上昇に伴い意味拡張の用例が増加すること、形容詞を述語として認識や評価を示す<叙述用法>の用例が特徴的であることなどが明らかになった。さらに、次元形容詞の<修飾用法>において共起語を調べた結果、教材レベルの上昇につれ、複合動詞と概念の抽象度が高い動詞との共起が増加することが示された。今後の課題として、本研究で取り扱われない他国の日本語読解教材を集め、現時点のコーパスを充実させる作業を行い、追加調査を行うことが挙げられる。また、本研究で詳しく触れられなかった慣用表現と非対称性表現は、どのように言語教育現場に取り入れるべきかについても議論しようと考えている。

注

- (1) 本研究は、日本英語コーパス学会・語彙研究会(2021)、全国日本語教育学会・秋季大会(2021)で発表された内容を統合し、加筆・修正したものである。
- (2) 樋口(2001)では、「質形容詞」を「特性形容詞」と改称している。
- (3) 場所化成分について、西内(2007:410)では「場所化成分とは、『ところ』などの、場所の限定が広がる名詞である。『ところ』付与は、場所性をmarkedに取り上げる(森山1988)。また、『前』、『後ろ』、『左』、『右』、『方』など、方向を表す相対名詞(奥津1974)も、ある方向に位置する任意の場所を指定する意味を付与する場所化成分として扱われる」という指摘がされている。
- (4) 形容動詞は、広く学校文法で一つの品詞として挙げられる。その名称は、明治37年の『中等教科明治文典』に芳賀矢一が、それらの言葉は「性質が形容詞と等しく、活用が動詞と等しい」ということから命名したものである。
- (5) 形容詞における「イ形容詞」と「ナ形容詞」は、連用形を基本形として、それぞれが名詞にかかる時の語尾によって定義されたものである。語形によって区別することは学習者にとってわかりやすいため、日本語教育現場で使われる分類方法である。
- (6) 「3.1 抽象な関係」「3.2 人間活動-精神及び行為」「3.3 自然現象」に分類される。
- (7) 「中項目」は、表2を参照。
- (8) 国語辞典における多義語の意味配列は、語の中心的意味を検討する際に重視する2つの側面、つまり個別の意味の間の意味関係と使用頻度の両方を考慮する(cf.国広2006)。よって、国語辞典における第一義とする語義は、基本的に多義語の中心的意味と認定すればよいと考えられる。このことから、本研究における多義語の意味分類は、国語辞典『大辞林』第三版(2006)に記述される第一義とする語義を参照したものである。
- (9) 「関係」は『分類語彙表』(1964, 2004)において「抽象的關係」という。
- (10) 「活動」は『分類語彙表』(1964, 2004)において「人間活動-精神及び行為」という。
- (11) 例えば、「高い/低い」は対義関係をもつものの、実際の運用にあたっては、常にきれいな対称性が見られるとは言えない。具体的には「香りが高い」のような比喩的な用法は、「香りが低い」とは言えず、注意が必要である。

参考文献

- 荒正子(1989)「形容詞の意味的なタイプ」『ことばの科学』3 むぎ書房
- 雨宮俊彦他(2008)「共感覚形容詞の理解可能性と使用頻度の対応について」『関西大学社会学部起用』(39-3) pp.167-200
- 奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論』東京:大修館書店
- 国広哲弥(1970)「日本語次元形容詞の体系」『言語の科学』2 東京言語研究所 pp.13-26
- 国広哲弥(1982)『意味論の用法』大修館 pp.156-168
- 国広哲弥(2006)『日本語の多義動詞:理想の国語辞典』2 大修館
- 小出慶一(2000)「次元形容詞の空間的用法と非空間的用法」『群馬県立女子大学紀要』21 pp.107-113
- 国立国語研究所(1964)『分類語彙表』秀英出版
- 鈴木重幸(1983)「形態論的なカテゴリーについて」『教育国語』72 むぎ書房
- 仁田義雄(1998)「日本語文法における形容詞」『月刊言語』27(3)
- スルダノヴィッチ・イレナ他(2013)「日本語教育用の語彙リストと難易度レベル」『第3回 コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.281-290
- 重松淳(1993)「語彙教育」『日本語学を学ぶ人のために』世界思想社 pp.268-279
- 西内沙恵(2017)「現代日本語における次元形容詞の意味表出」『認知言語学会論文集』17 pp.409-415
- 西尾寅弥(1972)『形容詞の意味・用法に関する記述的研究』秀英出版
- 樋口文彦(1996)「形容詞の分類-状態形容詞と質形容詞-」『ことばの科学』7 pp.39-60 むぎ書房
- 樋口文彦(2001)「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学』10 pp.43-66 むぎ書房
- 森田良行(1980)「日本語の形容詞について」『講座日本語教育』(第16分冊) pp.108-124 早稲田大学語学教育研究所
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』東京:明治書院

八亀裕美(2003)「形容詞の評価的な意味と形容詞分類」『阪大日本語研究』15 pp.13-40

八亀裕美(2008)『日本語形容詞の記述的研究-類型論的視点から-』明治書院

柳井晴夫(1994)『多変量データ解析法—理論と応用—』朝倉書店

参考辞典

『国語辞典』第十一版(2013) 旺文社

『大辞林』第二版(1995) 三省堂

『大辞林』第三版(2006) 三省堂

『明鏡国語辞典』第2版(2010) 大修館書店

関連URL

国立国語研究所『分類語彙表 増補改訂版DB』(2004)

https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/goihyo.